

皆さん、こんにちは。今回もセブ島現地NGO担当濱野がプルメリアの会報をお届けします。

毎年同じ時期に会報を執筆しますので、既に皆さまにはおなじみになっているかも知れませんが、この時期（10月半ば）は1学年の丁度中間に当たり、小学校から大学まで、試験期間中です。大学では前期期末試験、小中高では全4学期の第2学期期末試験…と言うイメージになります。



試験期間中は授業時間他が日本と同様、短く変則的になる為、特に夕刻のラッシュが若干緩和されている感じがします。しかし、飽くまでも若干の緩和であり、それなりの交通渋滞がある事は最早、当たり前になっています。さて、今回は、この国の現状と何故、教育支援なのか…と言うところに重点を置いてご報告いたします。

1. 女高男低

さて、この章のタイトルに付けた女高男低（じょこうだんてい）は、どうも最近出て来た用語のようです。しかし、この用語、フィリピンと言う国を良く知る人にはピンとくる言葉かも知れません。

ここフィリピンで統計を取ってみると女性の大学進学率は高く、結果として企業での女性管理職の比率も高く、良く言えば、「女性の社会進出が進んでいる」と言う事になるかと思えます。

正直なお話として、この国で上がって来る統計はその根拠、出所が疑わしいものが多くて全て鵜呑みには出来ないの、正確な実態が掴みづらい側面もありますが、私がここでの20年近い滞在、教育現場での実際を見て来た観点からすると、恐らく、過去十数年から現在に至るまで、大学での男女比は男子30%、女子70%と言うのが現実に近い数字だと思えます。

因みに日本の状況を調べてみましたところ、平成27年度の政府による統計が見つかりましたが、全学部全学科の学生の男女比は男子55.9%女子44.1%だったようです。

それではフィリピンの人口の男女構成比はどうなっているのかと言うと、実は、ほぼ五分五分で、多少、女性が多い程度ようです。そして、これは、当NGOの仕事の関連で学校の施設に出入らせて頂く機会の多い私は、学年別クラス別の男女比を集計した表等を目にする事が出来るので、「小学校までを見る限り」は、ほぼ、この比率は正しいと思われます。



しかし、フィリピンの人口構成における男女比は男性3割、女性7割という都市伝説があり、フィリピンをよく知る日本人あるいはフィリピンの人たちの中にも、それを頑なに信じている向きがあります。反面、この3:7と言う数字の根拠は要は「目立った場所」にいる男性と女性の比率と言え、あながち外れではないかも知れない…と言う事に気が付くのです。また、これは大学生の男女比3:7にも一致を見るのです。

要は、フィリピン社会の中において、メジャーな立場で活躍する女性たちの姿が、ここに浮かび上がり、この社会の姿、「女高男低」が見えてくるのです。

プルメリアの里親の皆さんにはご存じの通り、教育支援NGOプルメリアでの支援学生（里子、奨学生）の選抜は、原則、学業成績+学校推薦+家庭訪問の3点の総合評価からなり、実を言えば学校での成績(貧困の中でも学校へ行き学びたいという勉強への意欲)が大きなウェートを占めています。

そして、このスタンダードに沿って学生を選抜した時に、やはり現れるのが、3:7の比率で、前身の団体を含め、20年近く、この活動に関わっている中、ずっと、この男女比を見ていますが、ほぼ毎年、この比率は変わらず、年によっては、男女比2:8に近づいた事も少なくはありませんでした。

また、私は現在、ウィークディをフルタイムで経済特区（外国企業を誘致する為の工業団地）で日系企業の仕事をしておりませんが、ここでの現地人の採用も全体で男女比3:7、場合によっては2:8に近づく感じですが、

2. 男女の性差、能力差？

こうしたお話の中、人によっては、「これは、民族に見られる特異性で遺伝的にフィリピン人男性は能力が低いのではないか」…とした見方をしてしまうかも知れません。しかし、私が、ここに 20 年近く暮らした中、身近では家内（フィリピン人）の家族兄弟達と 5 年近くに渡って同居した事などから何となく見えた事は、こうして男性たちの能力が低くなっているのは、寧ろ社会環境や家庭内の躰に起因するところが大きいように思われます。

元々フィリピンは亜熱帯気候の島で、植民地化された時代以前は農耕民族ではなく、狩猟採集を中心に、食糧面ではそんなに無茶苦茶に頑張らなくても食べていく事は出来た筈です。それ故、北方の冬のある国々のように生活の場面で男性の体力に頼らずとも、何とかなつた筈なのです。



恐らく、そうした背景からか、他の東南アジアの国々を見渡しても、「南方の男性は怠け者である」と揶揄されているケースが多いように思います。更には、そうした背景の結果、北方の強大な軍事力をもった白人たちに植民地として支配された、この国ではどうやら、植民地経営を安定化する為に、男性が立ち向かって来ないように、男性がダメになるように仕向けて来られたのではないかと生活習慣の中から洞察される事象が多々、あります。

また、ここが勘違いされやすいのですが、こうして女性が中心に家庭や経済他を動かしている中でも、男性の地位が低いと言えば、決してそうではなく寧ろ男性諸氏には「やりたい放題」の感すらあります。要は、ここで男性として生まれた時、大した努力はしなくとも、女性たちが手厚く面倒を見てくれるので、けっこう困らずに生きて行ける感じなのです。

それ故に、小学校時代には余り目立たないものの、学習内容が高度化し始める中高辺りから、家庭内で甘やかされた男子には、歯を食いしばって勉強に付いてゆこうと言う姿勢が薄く、大多数の親たちも、「男はそんなものだ」で済ませてしまうので、徐々に、男子のドロップアウトが目立ち始め、最終的には大学への進学率において女子に完膚なきまでに負ける…こうした図式が確立してしまっているようです。

また、ここで先に述べた「女子余り」の都市伝説を助長する事例として、特に庶民層においてはシングルマザーが極端に多いと言う事実があります。要は日本人的なモノの見方で捉えるなら、「無責任な男性が女性を妊娠させて逃げる」…とも取れるのですが、これは、ひよっとすると「世紀の勘違い」かも知れません。

それは何故かと言うと、言葉は悪いですが、「この程度の男」は、下手をすれば女性側が一生、食べさせていかねばならないという事にもなりかねないので、むしろ母一人で子どもを育てた方が経済的にも良い…とした発想も実はあるし、事実、そうなのです。

3. フィリピンの労働市場分析（人手余りと人手不足が同居する）

さて、ここまで随分、長々と書きましたが、これからのお話は先の第1章、第2章の話が前提にならないと中々、理解が難しく、教育支援の意味をご理解頂くうえで、必要になると思うからです。

先に述べましたが、私、平日は工業団地の日系企業で仕事しており、主な仕事内容は、通訳、翻訳、経理管理、人事サポートとジャンルの幅が広がっています。人事サポートには採用も含まれますので、実は教育支援で得た経験が大きな支えになっているし、現状の労働市場の情報にもリアルタイムで通じているのです。

そんな中で今のセブの状況を見てみますと、人手余りと人手不足が同居しているという何とも奇妙な状態が見て取れるのです。「スキル」という言葉が今、日本でも定着したようですが、このスキルレベルを仮にABCで3段階に分類し、Aを大卒以上、Bを高卒程度、Cを高校中退以下としたならば、Aは明らかに人手が不足し、B、Cは余っているような状況なのです。

つまり、ちょっと高度な事をやって貰おうとすると、その部分での人材は海外流出もあり、不足しているが、例えば前章で上げた男子のドロップアウトしたような人材は、ここでは対象外となり、例え余っていても業務遂行に耐えない…と言う事になります。



また、この辺り、日本での常識とは異なりますが、例えば、最近、ここセブでも拡大の一途を辿っている24時間営業のコンビニエンスストアですが、私もその業界にいたことがある人間なので、つい、この状況をプロ目線で見せてしまいましたが、先のスキルの分類で見た時、せめてBレベルじゃないと多分、業務遂行が難しいのです。（お客様へのサービス内容から判断すると、出来れば大学卒か在学中が好ましい）

その結果か、これだけ人手が余っていると思われている国で特に深夜営業の人手確保が難しいらしく、早朝、私が早出で仕事に向かう途中でコンビニに立ち寄れば、実は、「ワンオペ」が非常に多いのです(ワン・オペレーションの略、人手が足りない時間帯に店員一人で店舗運営のすべてを行う事)。話が元に戻ってしまいますが、要は「ワンオペ」が大変だからと、先に述べたドロップアウト男子を付けたところで使い物にならず、ややもすれば、店の商品やら金銭やらを持っていかれてしまう可能性すら出て来るので、「怖くて使えない」…と言う図式になっている事は火を見るよりも明らかなのです。

ちなみに、こうしたドロップアウト男子、あるいは奥さんに食わせて貰いながらブラブラしている男性たちは、ここでは「タンバイ」(スタンバイ)と呼ばれています。要は、今、なんだかんだと、ここフィリピンは経済成長真ただ中であり、ちゃんと勉強して証書を手にして真面目に働くだけの素養があれば、何とかするのは間違いないのですが、ここフィリピンでは、日本との大きな違いとして、社会背景もあって、知識情報を得る機会が実は学校に行かないと得られなくて、採用側も学歴ではかるしかないので、実は日本以上の学歴社会になってしまっています。

だからこそ現状として、この国では貧困層にあってもやる気と能力がある子たちが、大学の卒業証書を手にする事には日本以上に大きな将来への意味があるのです。



4. 卒業生からのメッセージ

以前にもご紹介した事がありますが、プルメリアの創成期に、セブの看護学校を主席で卒業した後、ニュージーランドで職を求めた、ジェドリー・モンタイレ君と言う看護師がおります。

現在、彼はニュージーランドの看護大学の講師を勤め、最近、ニュージーランドの看護師グループの代表としてスイス・ジュネーブのWHO本部へ派遣され、当地でのスピーチを行ってきました。

その彼に現役の奨学生たちへ一言かけてやって欲しいと依頼したところ、以下の文書を贈ってくれました。

(以下原文)

I am Jed Montayre, I am a previous scholar. I have known Mr. Hamano since 2001. I am now a lecturer in a nursing school here in Auckland, New Zealand. I encourage everyone to pursue their dreams and work hard for it. I was once at your position and I know very well the difficulties of being a student with very low or no resources at all. But that never stopped me to aim high, instead it became a motivation for me to achieve my goals. With Mr. Hamano's foundation, which supported my studies, I was able to finish my Bachelor's degree in Nursing. I became a professional nurse and I was able to migrate in New Zealand and continued my career here. Of course, it did not come easy, I have to double my efforts and dedicate time to study and get good grades in order to be successful. I have focused my energy to useful habits, like doing pre-readings and developing good time management while studying. I did all of these in order to achieve my dreams. Above all, I have been grateful to the people who have helped me succeed. Always looked back and remember the challenges you had and how great it is to think that you have surpassed all of those with all the efforts and determination. Just recently, I have visited the World Health Organization as a representative of New Zealand for the nursing leadership training. For me, this is a great achievement for someone like me who immigrated to NZ. These things happened because I have shown my commitment and dedication to the nursing profession. I have also exerted efforts so that I can do my job well. I am forever grateful to Mr Hamano for his support and believing in me when I first started my journey and my studies. Be determined and work for it! If I can do it, you can do it too!

(以下抄訳)

僕はジェド・リー・モンタイレと言います。濱野さんとは2001年以来の知り合いです。現在、ニュージーランドはオークランドで看護大の講師をしています。(後輩の)皆さんには、是非、夢を叶える為に頑張っていて欲しいと思っています。僕も以前は君たちと同じ境遇にありました。物(*恐らく教材等々の意)も十分に無い環境で学生である事の厳しさは僕も良く分かっています。

しかし、そうした厳しい環境にあっても、それが僕の夢を叶える障害になったとは思っていません。寧ろ、それがバネになったと感じています。そして、濱野さんの団体の御支援で、僕は、大学卒業証書を手にする事が出来ました。その後、看護師となり、ニュージーランドへ移民する事になりました。勿論、この過程において、良い成績を修めるように僕は人一倍の努力をしたと思います。

決して楽ではありませんでした。特別な事はしていなかった積りですが、予習復習を習慣化し、継続しました。そして、時間の使い方を工夫しました。勿論、これは僕の努力だけではなく、僕への支援があった事で成し得た事です。僕はその事を一生、忘れません。多分、君たちも同じ思いで頑張っている事でしょう。

最近、僕はニュージーランドの看護師リーダーシップトレーニングの代表として、スイス、ジュネーブのWHO本部を訪れました。僕は移民と言う境遇の中で、この荣誉に預かった事を本当に嬉しく思っています。僕は今の仕事に誇りをもって取り組んでいます。そして仕事を改善する為に何時も鋭意努力しています。僕は濱野さんの団体への感謝を一生、忘れないでしょう。僕はここまで頑張りました。君たちも一生懸命、頑張ってくださいね。僕が出来た事はきっと君たちにも出来ると思っています。

(以上抄訳)

思い出すのは、彼を支援し始めた当時の事です...

今は開発が進む、マクタン島の沿岸の不法占拠地に小屋を建て、一家7人で暮らしていた彼。トイレも電気も水道もガスも無い家で、毎日が野宿のような生活でした。

経済的に全く余裕がないので、十分に食べられず、水も毎朝、長男である彼が事故で体が動かなくなってしまった元運転手の父の代わりに井戸に水汲みに行き、それから学校へ5キロ以上の道のりを歩いて通っていました。

そんな環境で家に帰ってからは食事のあと、灯油ランプに火を灯して勉強をかかさなかった彼です。メッセージの中で時間の使い方の工夫と言っていますが、上記の通り、彼には家族の手伝いやら学校への通学で時間が食われ、一時、時間がないと嘆いていた事がありました。

それで私は、「暗記事項は隙間時間を狙って、寧ろ短時間に集中してやった方が効率が良い筈だよ」とアドバイスした事があり、それを彼は見事にモノにして成績が上がったと喜んだのを覚えています。



(ジェド・リー・モンタイレ)

彼について言えば、放置すれば、前の章で述べた「タンバイ」になっていた可能性すらあったかと思います。勿論、育った環境が悪すぎて最初から諦めているような人ではどうしようもありませんが、こうした人材を発掘出来て、このような成功を収めてくれた事は、何よりの喜びです。

こうした事が、私の考える「教育の重要性」なのです。